

### 1. 地理学とはいかなる学か

地表に刻まれた違い（多様性）に感動し、系統的に説明する営為→世の中いろいろだね！

人がつくってきた違いを説明するのが **Human Geography**

それぞれの違いのまとまりの単位が地域、大きな違いと小さな違い、微々たる違い

大きな違いには鳥の眼、微々たる違いには虫の眼→これを兼ね備えるのが正当な地理学者

日本の九州から東北までの農村風景は同じ→おじいさんは山へ・・・おばあさんは川へ・・・

大きな違いがないために微々たる違いにこだわる→日本で地理学が振るわない理由

北東北でも暖房文化は生まれなかった→北海道社会のオリジナリティは暖房文化を生む

### 2. 日本と南欧はほぼ同じ緯度、しかし農村・都市共に風景は大違い

熱帯気団に覆われる暑い夏は共通、しかし降水量が決定的に違う→山国日本には無数の谷川

小さな平野で水田稲作の極めて高い土地生産性を実現した→いまひと粒が 2000 粒に

山は柴刈（燃料）と落ち葉（肥料）のために補完的に使われてきただけ→豊かな森林が

南欧の麦畑の土地生産性は古来日本の水田の 8 分の 1 程度→山を牧草地やオリーブ畑に

牧草地は夏には枯れた茶褐色に（スペイン中部、トスカーナのオルチア溪谷の風景）

夏の高温乾燥に最も強いのがオリーブとブドウ→オリーブオイルと濃い赤ワイン

木のない山は家畜に頼る肉食・乳製品文化が育った証し→基本は二圃式農業（半分休閑）

アルプスの北は 12 世紀ごろから三圃式に→休閑が必要なくなったのはわずか 300 年前

ただし自然はつくってくれるわけではない→人が自然を活用してきたプロセスが重要

自然の使い方に勢いがつく（通態化）→棚田の造成、北海道における水田開発

→Augustin Berque のいう風土性→自然・風土・風土性の使い分け

### 3. ローマ帝国による都市という場の普遍化

civilization（文明）とは人類が都市をつくったことというのがヨーロッパの理解

小高い場所の基地 castra から都市 civitas へ

Roman Roads と城壁と水道橋による都市網の完成→広大な領域の支配を可能に

まさに civil engineering（土木工学）が城壁と広場と格子状の街路を持つ形をつくる

大通りの交差する広場 forum に重要な建物が集まる→のちに plaza

水道橋と通潤橋の対比、ヨーロッパは都市のため、日本は水田のために頑張った

日本に城壁がないことの意味は？

#### 4. 日本の対極にある南欧の石の文化

無数の石による大建造物→コロッセオ、大聖堂、水道橋（ベローナ、タラゴナ、ニーム）・・・

豊富な大理石の広範な利用（ポンペイの家庭の風呂など）

木材の不足、夏の日差しの強さなどが背景にあったか？

個性ある小都市が多く残るが都市によっては空家や廃墟も（アルベロベッロ、マテラ）

#### 5. アルプスの北では木の文化も

ドイツやフランスの広場には古い木造建築が残る（フランクフルト、ディジョン、トロワ）

北では三圃式農業が定着、それでも家畜あつての農業

18世紀以後の四圃輪栽式の展開で山に植林も、牧草地の山はまだまだ多い（ペニン山脈）

#### 6. ヨーロッパの都市から学ぶこと

カフェ文化→中心市街地と広場の近くに人が住み、小さい店がしっかりと営業していること

効率には簡単に流されない小さくて強い存在→スペイン・バルはその最たるもの

信じられないような都市もある→ベネチア、アムステルダム

#### 7. あらためて日本を考える

水を得やすい山国の狭小な平野と夏の暑さを活用した人のワザの蓄積が水田農業を完成

4mの積雪の村にも肥沃な水田が（旧山古志村）

山は山のまま保たれてきた（水田ができない西日本の斜面集落には違った風景が）

今までの日本人は極めて定住志向の強い人たち→1億総兼業がその証拠

もとは水田の力→3反百姓でも生活できた→右へ倣えでこんなに豊かになった国はない

一方でよく似た暮らしの中でひと味違うワザを身につける努力があった

これが手仕事のワザ、今も先端のモノづくりあり

大工さんの鉋の切れ味、おばあちゃんのおいしい野菜に感動した人は多い

これらのワザはいのち育つ日本の風土を活用して育ってきたかけがえのない宝

右へ倣えの経済成長と効率化の中で失ってきたもの

森と農地と庭というのちあふれる場での手仕事の価値をあらためて考えよう